青森市近野遺跡・野辺地町槻ノ木(1)遺跡の未報告土偶・土製品

－副題　土偶は分配されたのか－

成田　滋彦（青森県埋蔵文化財調査センター）

1 はじめに（図1）

今回紹介する土偶・土製品は、昭和50年の近野遺跡の調査と、平成５年の槻ノ木（１）遺跡の調査によって出土した資料である。当時は掲載外として取り扱われ、当センターの特別収蔵庫に保管されていた。今回、未報告の土偶・土製品を新たに実見する機会があり、再度観察する機会があった。あらためて未報告の土偶・土製品を実見すると、縄文時代における祭祀遺物にとって重要であり貴重なものであると認識した。そのため新たに本文にて報告するものである。なお、他の土偶・土製品については、すでに近野遺跡は青森県教育委員会刊行の青森県埋蔵文化財調査報告書第33集に報告され、槻ノ木（１）遺跡は青森県教育委員会刊行の青森県埋蔵文化財調査報告書第169集に報告されている。

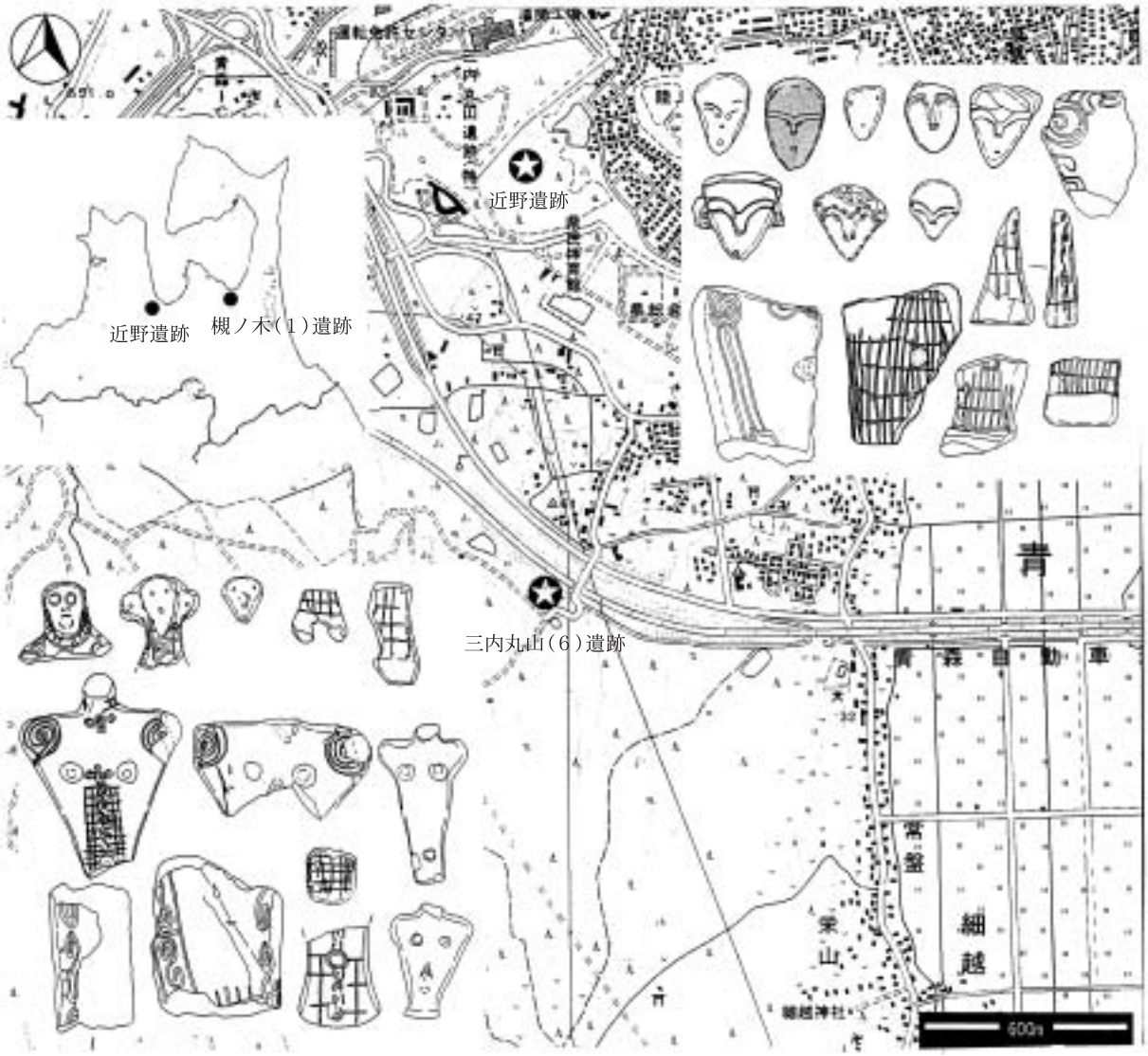


図１　近野遺跡・槻ノ木（１）遺跡・三内丸山（６）遺跡位置図

また、近野遺跡に関連して、近距離に位置する三内丸山（６）遺跡の土偶と比較・検討をおこない、土偶が分配されたのかというテーマで記載する。

２　近野遺跡遺跡出土土偶

今回報告する資料は、昭和50年の調査によって出土した資料である。土偶35点・三角形土偶２点・人面付土器２点・キノコ形土製品１点・土版１点・異形土製品３点・土器片利用土製品１点の計45点である。

土偶（図２－１～14・図３－15～25・図４－26～35）

土偶製作時における**粘土板**は一枚で製作(９)、上下を重ねて製作する二枚重ね(４・６)・左右を重ねて製作する二枚重ね(14・18)、芯を中心として左右に重ねていく三枚重ね(19)が確認できるが、二枚重ねで製作するものが多い。**混入物**は石英の混入の割合が多い点が指摘できる。**焼成**は一般に良好、**色調**は焼成時における黒班が多く全体的にくろっぽい色調を呈するものが多い。**整形**は幅0.5cmの細い工具を用いて、ヘラナデ調整をおこなっており、特に乳房部周辺のヘラナデは顕著である。(５)は表裏面に剥落痕跡がみられる。焼成時のハジケか二次的(人為)な剥落なのかは判断できなかった。(４)は首部・(５)は腕部の破損面が楕円形に窪んでおり、部位を接合する**ソケット**と思われる。(８)は首部に黒色物質が確認され**アスファルト**の可能性も考えられる。**形態**は全体の形態を知り得る資料がないので、各部位毎に記載する。顔部は頭頂部が平坦であり、顎部がとがった逆三角形で無文であり顔部表現はみられない(１)。腕部は湾曲したタイプ(５)・(８)と、腕部が平行なもの(４)・(６)がみられる。胴部は内側に屈曲するものが多い。脚部は足部をゆうし立脚形のもの(30・32～35)と足部をもたない十字形のもの(23・27～29)の形態であり二種のタイプが存在する。(８)・(10)・(11)は腕部に斜位の**貫通孔**が確認され(６)は紐ずれ痕跡が確認される。**文様**は横位と縦位が交差する格子状文(６・９・24)・連続した渦巻文(13)・単独の渦巻文(７)が施文されており、格子状文が多い。格子状文の施文手順には、縦位→横位(４・６・９)と横位→縦位(24)の施文の相異があり、つくり手の違い(作り手のクセ)がみられる。また(16・19・25)の刺突文は、東北地方南半部の南境式に多く用いられている技法であり、南半部における**他系統**の技法を本地域で土偶に採用している。(17)は臍部を中心として一段低くなっており、腹部部分を強調している。次段階の妊婦土偶の先駆けとなるものである。**製作時期**は(３)が縄文時代中期の円筒上層ｄ・ｅ式であり、他は縄文時代後期の十腰内Ⅰ式期に相当すると思われる。

三角形土偶（図４－36・37）

(36) は先端部が丸みをもつものであり、残存部から三角形を呈すると思われる。色調は暗く厚さは2.3cmと厚い。文様は渦巻文様を施文している。なお、辺部寄りには幅0.3cm・長さ1.3cmの溝があり製作時の空気孔と思われる。(37) は色調が暗褐色で全体に暗い色調を呈する。粘土板は二枚重ねで制作している。調整の表面ははっきりしないが、裏面にはヘラナデが一部確認できる。全体の形態から顔面をイメージできるが。対の窪み周辺に幅の狭いヘラナデが確認できる。このヘラナデは十腰内Ⅰ式の時期に製作された土偶（近野遺跡には多い）の乳房部の周縁に多々みられる[1]ことである。窪みは乳房部を貼り付ける窪みであると理解したい。形態は三角形であり頭頂部の辺はやや中央部が窪む、先端部は丸みをもち両端部は一部欠損があり剥がれている。乳房部は粘土・臍部は貫通孔で表している。

近 野 遺 跡

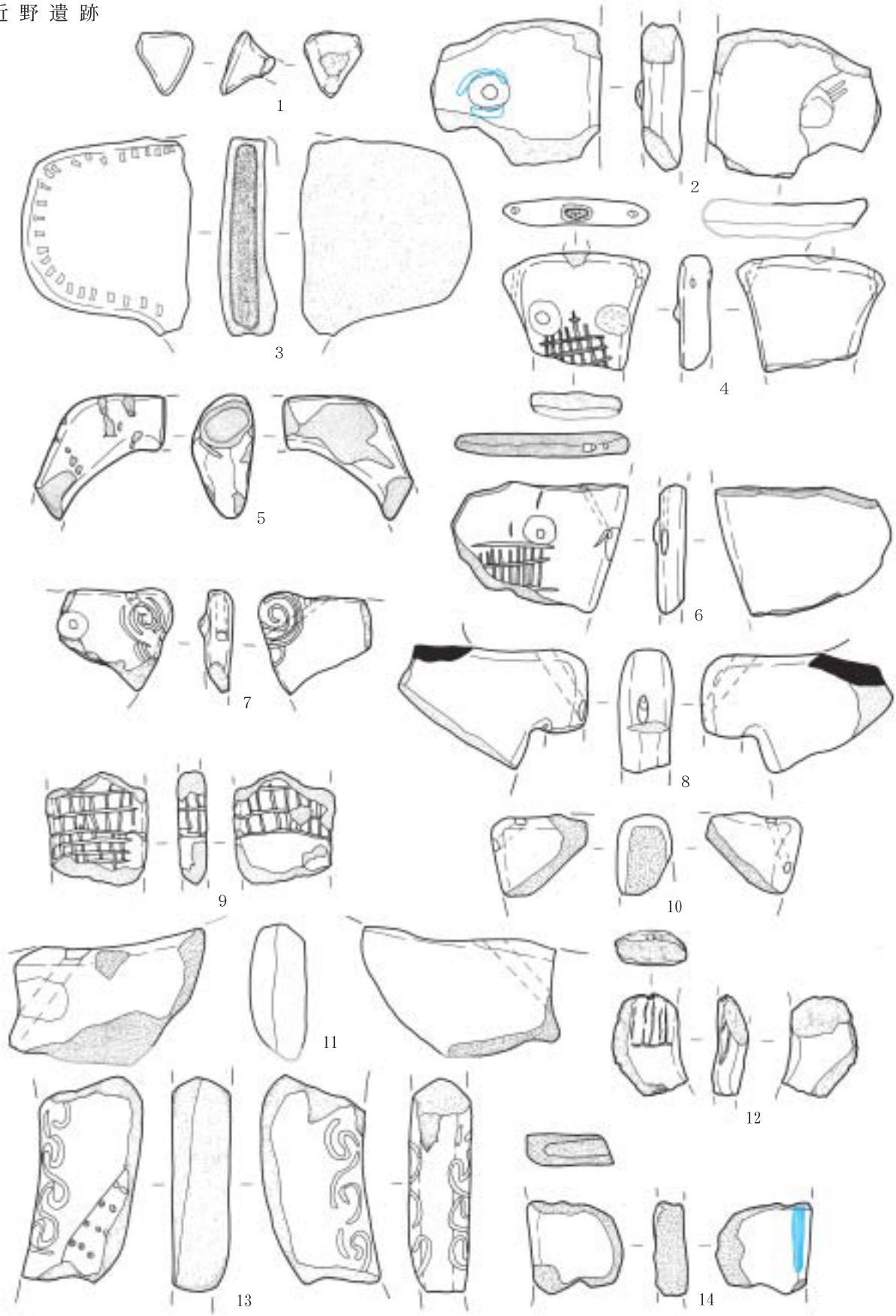


図２　近野遺跡土偶図（１）

黒印　アスファルト
青印　ヘラナデ調整

縮尺２分の１

近野遺跡

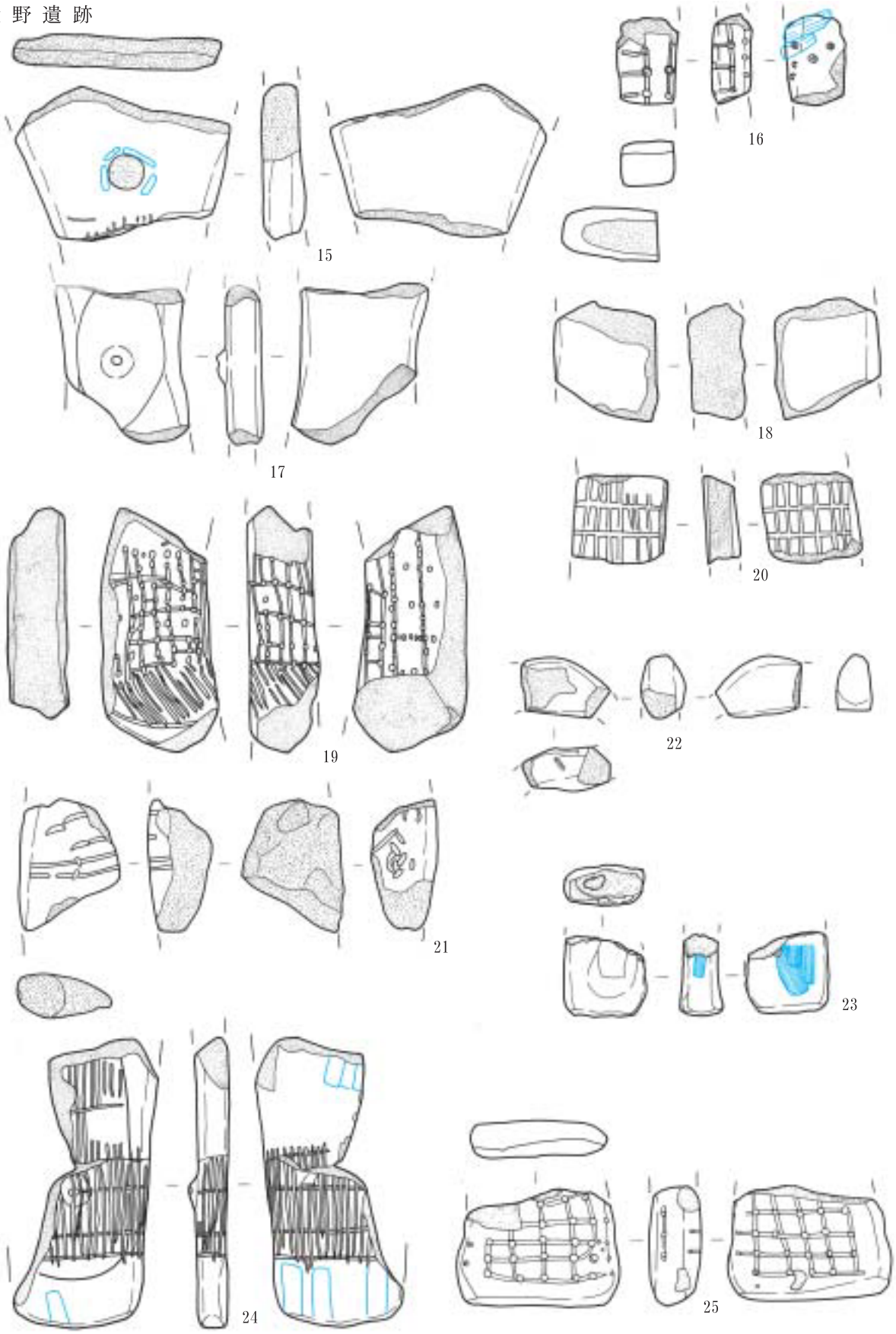


図３　近野遺跡土偶図（２）

青印　ヘラナデ調整
縮尺２分の１

近 野 遺 跡

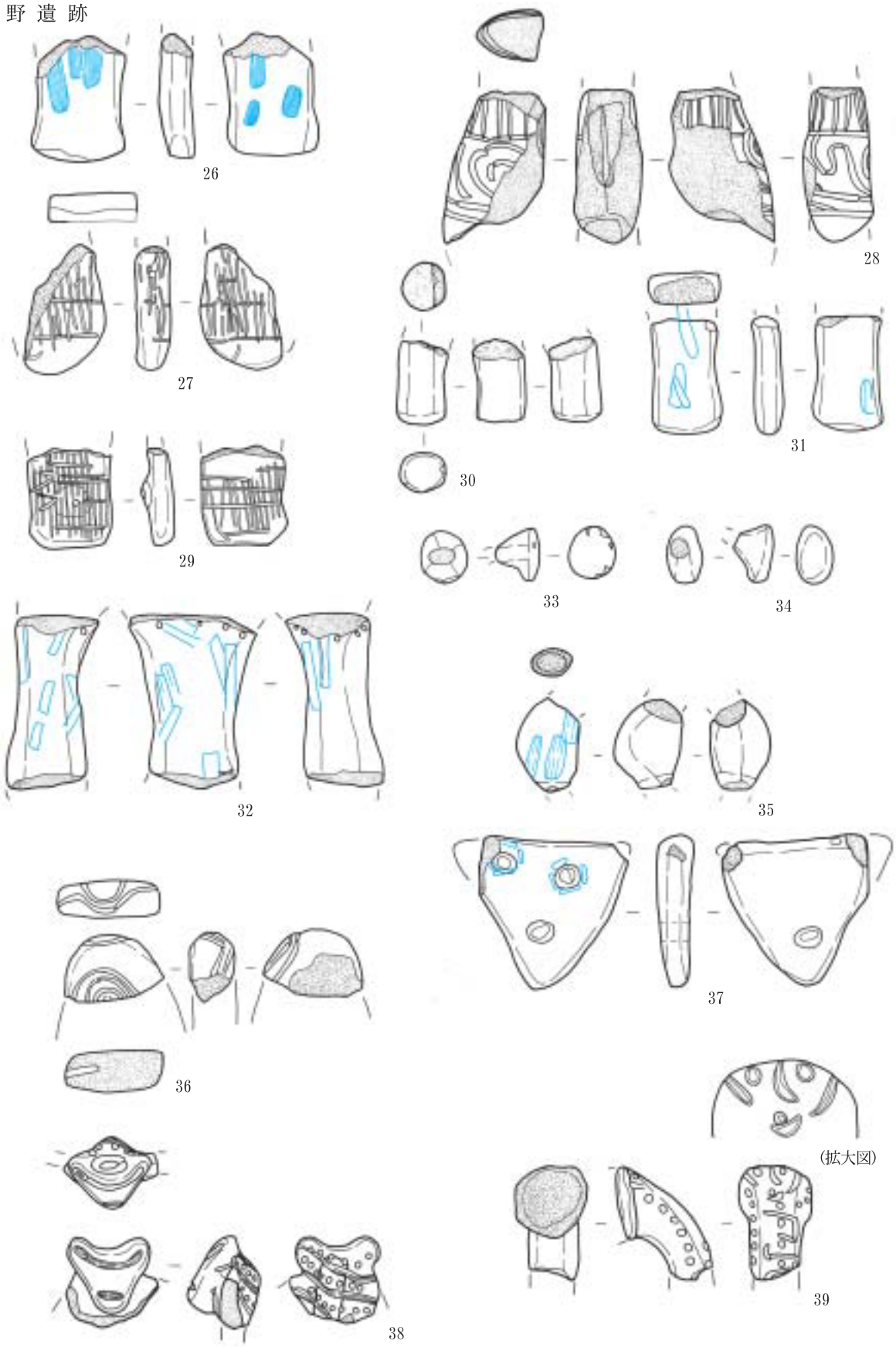
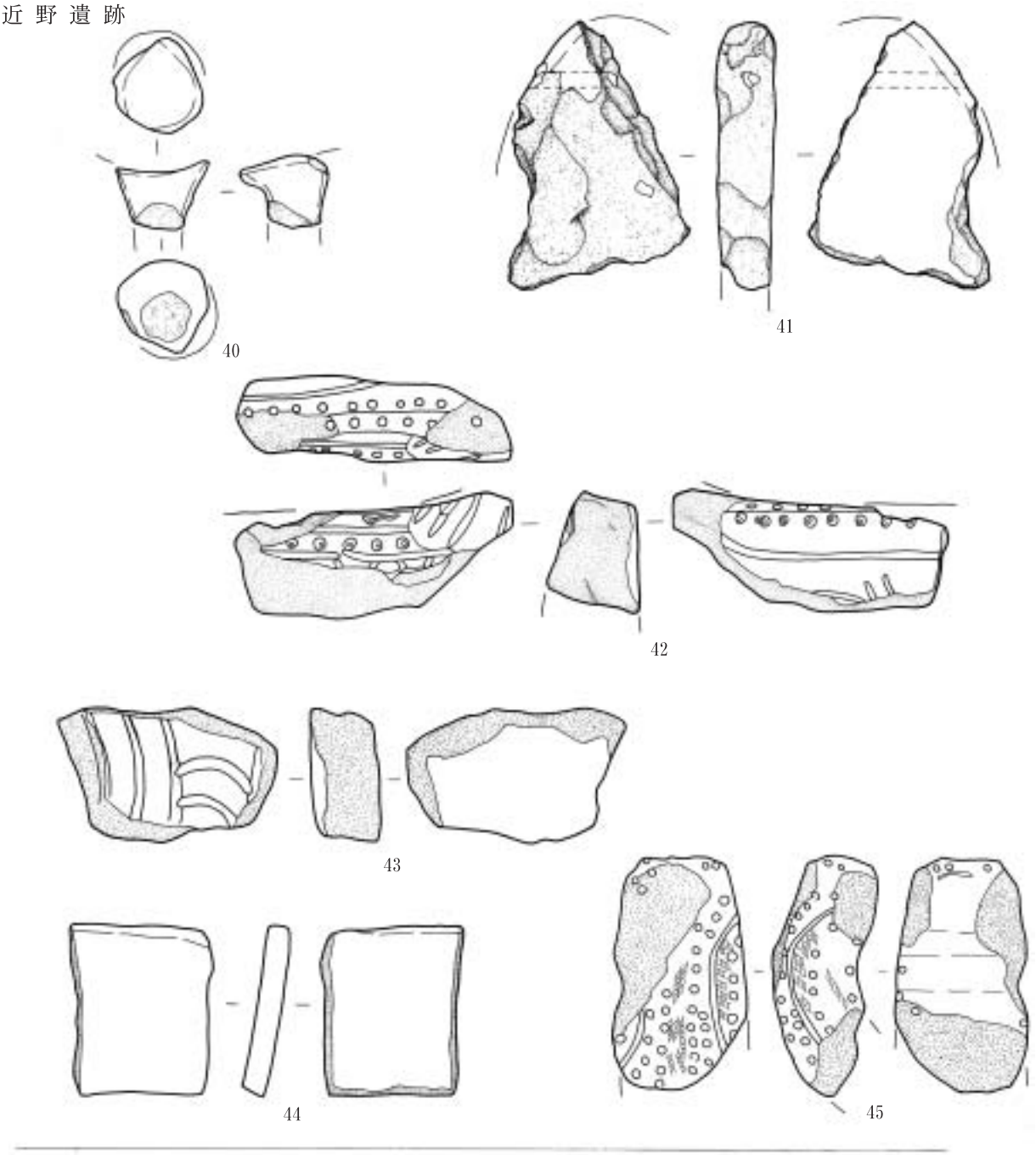


図４　近野遺跡土偶・土製品図

青印　ヘラナデ調整
縮尺２分の１

近野遺跡



槻ノ木(1)遺跡

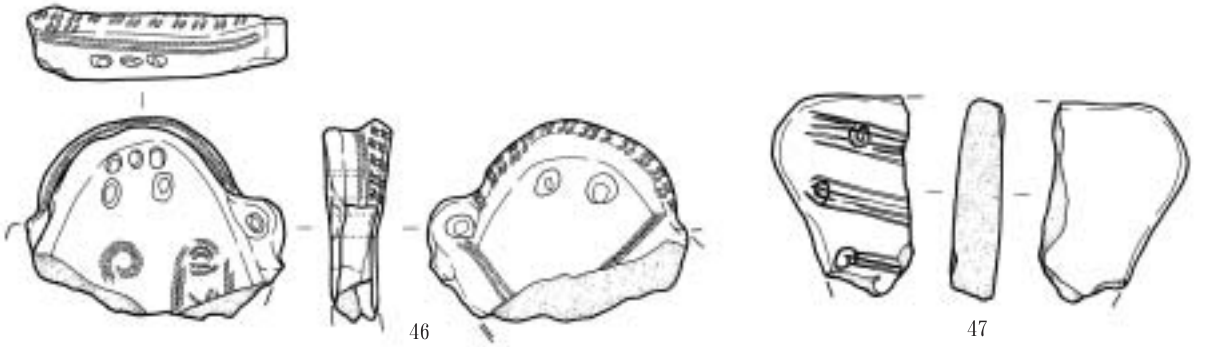


図５　近野遺跡土製品・槻ノ木（１）遺跡土偶　　縮尺２分の１

人面付土器（図４－38・39）

(38) は土器の口唇部上面の内側に貼り付けており、顎がとがり頭頂部が二股に分かれ全体の形態はハート形を呈する。色調は暗く焼成は良好である。文様施文は眼部をU字状に施文し、頭頂部には円形文を施文しており、全体の様相は人か動物か判然としない。(39) は壺形土器の把手部分に施文されているもので、明るい色調である。顔面は輪郭で逆三角形に区別し内部に眼部と口部を円形刺突で施文し鼻部はし字形で表現しているが稚拙な表現である。

キノコ形土製品（図５－40）

色調は明るい。傘部は窪み頸部は直立しており無文である。

土版（図５－41）

色調は明るく表面が多く剥落している。残存部から判断すると楕円形を呈すると思われる。貫通孔は先端部寄りに横位にみられる。形態的には、人形・足形付土版に類似している。

異形土製品（図５－42・43・45）

厚さが厚く日常容器と相異するものを異形土製品として取り扱った。(42) は口縁部で暗い色調を呈し、(43) は胴部で明るい色調を呈し、施文は連続刺突文を施文している。(45) は環状土製品とも考えたが、端部で止まり環状を呈していないため、異形土製品に含めた。

土器片利用土製品（図５－44）

深鉢形の口縁部破片を用いている。打ち欠きには口縁部を残して周縁を打ち欠いて方形に整形をおこなっている。

３　槻ノ木（１）遺跡出土土偶（図５－46・47）

青森県野辺地町に所在し、青森県埋蔵文化財調査センターが平成５年に発掘調査を実施した。調査の結果、竪穴住居跡・土抗・フラスコ状ピット等が検出し、縄文時代中期の集落跡である。

土偶は遺構外の２点で、(46) は頭頂部が丸みをもち、眼は孔で表し耳部にも穿孔がみられる。頭頂部に３つの孔がみられる。表面は眼部の下位に渦巻文を施文し、裏面は斜位の撚糸圧根を施文している。縁が盛り上がっているため縁寄りは指ナデを用い裏面はヘラナデを用いている。粘土板は二枚重ねである。細礫を含むが石英は少ない。色調は明るく黒班が確認される。(47) は、混入物には石英がめだつ。色調は明るく表面に黒班が確認できる。粘土板は一枚のつくりである。調整は表裏面は確認できなかったが、側縁部の調整にヘラナデが確認できる。残存部は右腕部で十字形土偶
と思われる。文様は表面に四条の沈線を横位に施文し、末端及び中間に渦巻文を施文している。表面は無文である。

４　土偶は他の遺跡に分配されたのか

近野遺跡の未報告土偶を整理していくうちに、近野遺跡で出土した土偶と三内丸山（６）遺跡の土偶と関連があるのではないかと思った。何故にこのような発想になったのかというと、以前から三内丸山遺跡では土偶ムラと呼ばれるほど大量の土偶が出土し1,600点以上の土偶[(2)]が出土している。このことから筆者は大量に出土する遺跡において、土偶の分配・交換が行われていたのではないかという仮説[(3)]をたてていた。つまり三内丸山遺跡で分配がおこなわれていたのなら、次の時期の縄文時代後

期の段階でも伝統は継承されていたのではと考えた。狩猟・採集を基本とした社会の伝統が突然遮断され廃絶するとは考えにくい、このことは当該地域の土偶の形態を概観しても、板状の十字形土偶の伝統は早期から後期の段階においても何世代にわたって連綿と継承されているのである。また、両遺跡を取り上げた理由は３点あげられる。第１点は両遺跡が1.200mと位置的に近い点、第２点は製作時期が後期の十腰内Ⅰ式期である点、第３点は実測図をみると相似面をもつ点などがあげられる。そのため、平成21年の２月に埋蔵文化財調査センター多目的室を利用して、センター所蔵の近野遺跡・三内丸山（６）遺跡の土偶をすべて広げてみた。

土偶観察に入る前に両遺跡の概要を簡略に記載する。近野遺跡は、縄文時代中期・後期の集落跡である。三内丸山遺跡と同一丘陵に位置している。縄文時代後期の十腰内Ⅰ式期では、大量の遺物（遺物包含層）と土坑群・粘土採掘坑を有する遺跡である。土偶は108点（今回の未報告35点を合わせると143点）出土し三桁の数値は本県では近野遺跡だけである。一方の三内丸山（６）遺跡は近野遺跡から南側に1.200mの丘陵地に位置し縄文時代中・後期の集落跡である。土偶は74点出土し県内では近野遺跡に次ぐ出土量を呈している。なお、後期土偶については小笠原雅行（2005）が集成及び分析をおこなっている。

土偶観察

胎土の混入物では差異がみられなかった。**色調**は近野遺跡で表裏面に黒斑が多く全体的にくろっぽい暗褐色の色調を呈し、三内丸山（６）遺跡では明るい褐色を呈する土偶が多い。**厚さ**では近野遺跡では一般に厚く、三内丸山（６）遺跡では一般に薄い。**文様**は一部で類似面をもつものの格子状文をとりあげると、近野遺跡では格子状オンリーであるが、三内丸山（６）遺跡では格子状文と連続渦巻文を組み合わせた文様構成である。また、三内丸山（６）遺跡では縁辺部に連続渦巻文を施文する例が多い。**施文位置・施文工具**（沈線の幅・長さ）が相異する。土偶を観察すると、土偶の**つくり手**の感覚が違い土偶に対する違和感（別物）を感じた。この感覚の相異は、土偶の観察をお手伝いをしていただいた内勤３人（数多くの土偶・土製品を実測）とも共通した意見であり、両遺跡の土偶をみて同様な違和感をもったとの事である。つまり、結論をまとめると両遺跡の土偶は、つくり手が全く違い、土偶の分配・交換はみられず、遺跡の単位で土偶を製作したものと考えられる[(4)]。なお土偶の分配については、小野美代子（小野1984）が土偶の接合率の低さから、一定の場所から持ち出されたという視点であり、小林達雄（小林1988）は釈迦堂遺跡の土偶と谷一つへだてた他の遺跡と接合したという遺跡間の接合の視点、谷口康浩（谷口1990）は長野県増野新切遺跡から３体分の土偶から５棟の住居跡から出土ししたことから、分配され外へ持ち出されたという遺構面の視点、江坂輝弥（江坂1990）が茨城県の立木貝塚が1.000点を超える土偶が周辺の集落に分配したという製作地と周辺集落からの視点などかあげられ土偶は分配されたという考えである。特に江坂輝弥の視点は筆者の遺跡の対比から土偶観察をするという考えと同じなのであるが、果たして土偶観察をしたうえでの結論なのか、わからない点が多い。小野・小林・谷口の視点は、土偶の部位が見つからないのは、他の場所にあるはずだという最終的に一つの物体として存在しているという考えであるが、視点を変えて考えると、土偶の存在しない部分は遺跡内で処理され粉砕されたのではないだろうか、このことは、遺跡内から出土する土偶を投影してみると、一定の大きさに集約されており、そのため他の部位はみられないと判断したい。また、つくり手に関しては甲野勇氏が『…中期以降になるとこの製作はもっぱら土偶つ

くりの人々の手にゆだねられた考え方がよいように思われます…』（甲野1995）土偶づくりの専門職をあげたが、後期の段階は板状の中実土偶であり、技術的にに特殊なものとは考えられず、専門集団の存在は否定したい。それでは、両遺跡内で何人が土偶製作に携わったのかという事であるが、土偶破片も文様施文につくり手のクセが確認されるものの、特定の人間が限定した土偶を製作していたのではなく、多くの人間が製作した土偶（遺跡内の土偶を、つくり手のクセでくくるとしたら１～２点）であり、数多くのつくり手によって土偶は製作されたと考えられる。そのため、縄文時代後期前葉の近野遺跡と三内丸山（６）遺跡とでは、土偶分配及び交換は存在しなかったという結論にいたった。

註

（１）　この乳房部のヘラナデ調整は縄文時代中期の青森市三内山（６）遺跡の土偶の乳房部を実見したが、ヘラナデ調整は確認できなかった。

（２）　三内丸山遺跡は、いまだ整理中の段階であり、調査終了後15年たっても終わらないという莫大な量であるといわれている。そのため出土個数は年々変化しており、今回の個数は青森県史三内丸山遺跡編（青森県2002）の出土個数を用いた。なお、小笠原雅行は土偶研究会の発表の中で三内丸山遺跡から1,800点以上出土しているという発言があったが、公式発表でないので点数は県史にたよったが、三内丸山遺跡が日本一の土偶出土遺跡であることに変わりはない。

（３）　土偶の分配（富山の薬売り）（成田2002・2008）があったという設である。実は馬淵川流域に位置する三戸町泉山遺跡と二戸市雨滝遺跡（明治大学所蔵）の縄文時代晩期土偶を比較・検討したことがある。観察の結果は全く別物であり、分配されていないという結論となった。なお、金子昭彦（2009）は、縄文時代晩期の大型遮光器土偶について、分配の可能性を指摘しているが、筆者も同意見であり大型遮光器土偶に注目し、観察を進めていきたいと思う。

（４）　三内丸山(６)遺跡の土偶接合例はなかったが、今回の観察で県埋文第327集の図132－１と図224－６が接合したものであり、約40m離れて接合した。ただし、この土偶は欠損部の腕部と胴体部とでは色調が全く違い、色調の境目を目安としてもぎとったという印象を与える土偶である。

引用・参考文献

青森県教育委員会（1975）「近野遺跡発掘調査報告書（Ⅱ）」青森県埋蔵文化財調査報告書第22集
青森県教育委員会（1977）「近野遺跡発掘調査報告書（Ⅲ）」青森県埋蔵文化財調査報告書第33集
青森県教育委員会（1995）「槻ノ木（１）遺跡」青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第169集
青森県教育委員会（1999）「三内丸山（６）遺跡Ⅰ」青森県埋蔵文化財調査報告書第257集
青森県教育委員会（2000）「三内丸山（６）遺跡Ⅱ」青森県埋蔵文化財調査報告書第279集
青森県教育委員会（2001）「三内丸山（６）遺跡Ⅲ」青森県埋蔵文化財調査報告書第307集
青森県教育委員会（2002）「三内丸山（６）遺跡Ⅳ」青森県埋蔵文化財調査報告書第327集
青森県（2002）「青森県史 別編　三内丸山遺跡」
江坂輝弥（1990）「日本の土偶」　六興出版
小笠原雅行（2005）「三内丸山（６）遺跡の土偶－十腰内Ⅰ式前半期の土偶－」葛西励先生還暦記念論文集刊行会

小野美代子（1984）「土偶の知識」東京美術
金子昭彦（2009）「東北地方南部の中空土偶の成立」 第６回土偶研究会北海道大会資料　土偶研究会
甲野勇（1995）「縄文土器のはなし（解説付新装版）」学生社
小林達雄（1988）「縄文人の道具」講談社
谷口康浩（1990）「土偶のこわれかた」季刊考古学第30号　雄山閣出版
成田滋彦（2002）「土偶を持って、花の東京に行ったときの話」ストーンサークル第５号
成田滋彦（2008）「青森県の土偶」『2007是川縄文シンポジウム』 八戸市教育委員会

近野遺跡土偶・土製品

図番号	出土地	層位	種別	部種	法量（cm）	重量（g）	備考
図2−1	A地	1層	土偶	顔部	長さ2.3　幅2.1　厚さ2.0	4.7	ー
図2−2	DQ−100	Ⅰ層	土偶	胸部	長さ(5.4)　幅(6.2)　厚さ1.7	49.5	二枚重ね　ヘラ調整
図2−3	DK−105	Ⅱ層	土偶	腕部	長さ(7.3)　幅(6.2)　厚さ1.9	71.8	ソケット状を呈する
図2−4	DO−108	Ⅱ層	土偶	体部	長さ(4.3)　幅(5.3)　厚さ1.3	23.4	ソケット状を呈する
図2−5	DR−104	Ⅰ層	土偶	腕部	長さ(4.5)　幅2.2　厚さ(4.8)	28.8	ソケット状を呈する
図2−6	DM−104	Ⅱ層	土偶	胸部	長さ(4.7)　幅(6.2)　厚さ1.1	31.9	貫通孔(紐ずれ) 二枚重ね
図2−7	DQ−104	Ⅰ層	土偶	胸部	長さ(3.7)　幅(4.2)　厚さ1.2	13.4	貫通孔　一枚
図2−8	DP−107	Ⅱ層	土偶	胸部	長さ(4.5)　幅(6.9)　厚さ2.0	56	貫通孔有り
図2−9	113小	覆土	土偶	体部	長さ(4.2)　幅(3.7)　厚さ(1.0)	16.7	ー
図2−10	DO−106	Ⅱ層	土偶	右腕部	長さ(3.2)　幅(3.4)　厚さ2.0	16.5	二枚重ね
図2−11	DO−106	Ⅰ層	土偶	腕部	長さ(7.4)　幅(4.5)　厚さ2.1	70.3	貫通孔　二枚重ね
図2−12	EI−114	Ⅰ層	土偶	体部	長さ(3.7)　幅(1.9)　厚さ1.2	11.6	ー
図2−13	DM−105	Ⅰ層	土偶	臍部	長さ(7.8)　幅(3.8)　厚さ2.1	80.8	二枚重ね
図2−14	67H	底直	土偶	体部	長さ(3.4)　幅(3.5)　厚さ(1.2)	14.3	二枚重ね　ヘラ調整
図3−15	120小	覆土	土偶	臍部	長さ(5.4)　幅(7.5)　厚さ1.6	51.8	二枚重ね　ヘラ調整
図3−16	ー	ー	土偶	体部	長さ(3.1)　幅(2.1)　厚さ1.3	9.5	二枚重ね　ヘラ調整
図3−17	209小	Ⅴ層	土偶	臍部	長さ(5.5)　幅(4.3)　厚さ1.5	32.7	一枚
図3−18	69H DP−104	Ⅱ層	土偶	体部	長さ(4.1)　幅(3.5)　厚さ1.9	30.2	二枚重ね
図3−19	DQ−102	Ⅱ層	土偶	体部	長さ(8.5)　幅(4.0)　厚さ2.3	78.2	三枚重ね
図3−20	70HD区	ー	土偶	体部	長さ(3.2)　幅(3.2)　厚さ1.2	16.7	ー
図3−21	DM−107	Ⅰ層	土偶	体部	長さ(4.6)　幅(3.5)　厚さ2.1	25.7	二枚重ね
図3−22	EI−?	ー	土偶	左腕部	長さ(2.2)　幅(2.9)　厚さ1.1	8.8	二枚重ね　ヘラ調整
図3−23	69H DQ−104	Ⅱ層	土偶	脚部	長さ(2.9)　幅(3.9)　厚さ1.5	11.7	ソケット状を呈する ヘラ調整
図3−24	DN−97	Ⅰ層	土偶	臍部	長さ(10.1) 幅(4.5) 厚さ1.4	57.6	二枚重ね　ヘラ調整
図3−25	DM−109	Ⅰ層	土偶	脚部	長さ(4.1)　幅(5.7)　厚さ1.7	43.7	二枚重ね
図4−26	DM−107	Ⅱ層	土偶	脚部	長さ(4.4)　幅(3.2)　厚さ1.1	17.8	二枚重ね　ヘラ調整
図4−27	DK−196	Ⅱ層	土偶	脚部	長さ(4.5)　幅(2.8)　厚さ1.3	12	二枚重ね
図4−28	DO−101	1層	土偶	右脚部	長さ(5.4)　幅(3.6)　厚さ2.3	38.4	二枚重ね
図4−29	71H	カンゴウ内	土偶	臍部	長さ(3.5)　幅(2.9)　厚さ1.1	9.7	ー
図4−30	DO−101	Ⅰ層	土偶	右脚部	長さ(3.0)　幅1.6　厚さ1.6	9.7	二枚重ね
図4−31	EI−115	Ⅰ層	土偶	脚部	長さ(4.0)　幅(2.9)　厚さ1.0	11.8	二枚重ね　ヘラ調整
図4−32	166H	1層	土偶	脚部	長さ(6.1)　幅(2.9)　厚さ4.4	62.3	ヘラ調整
図4−33	DO−105	1層	土偶	足部	長さ1.8　幅1.6　厚さ(1.6)	2.9	ー
図4−34	66H	Ⅰ層	土偶	足部	長さ(2.0)　幅1.2　厚さ(1.4)	2.2	ー
図4−35	137小	覆土	土偶	右脚部	長さ(3.2)　幅(2.1)　厚さ2.4	14.3	ヘラ調整
図4−36	DP−104	Ⅰ層	土偶	三角形土偶	長さ(2.3)　幅(3.5)　厚さ1.6	12.8	空気孔？
図4−37	100小	1・2層	土偶	三角形土偶	長さ(5.3)　幅(5.2)　厚さ1.3	27.6	ヘラ調整
図4−38	72H	1層	土製品	人面付土器	長さ(3.2)　幅(3.3)　厚さ(2.4)	15.1	ー
図4−39	DR−109	2層	土製品	人面付土器	長さ(4.0)　幅2.5　厚さ(3.4)	16.6	土器の把手部分
図5−40	DL−104	1層	土製品	茸形土製品	長さ3.0　幅2.8　厚さ(2.1)	10.3	無文
図5−41	DR−108	Ⅱ層	土製品	土版	長さ(8.4)　幅(5.7)　厚さ1.9	71.4	横位に貫通孔
図5−42	EN−115	Ⅰ層	土製品	異形土製品	長さ(3.9)　幅(8.1)　厚さ2.9	63.5	ー
図5−43	EI−114	Ⅰ層	土製品	異形土製品	長さ(4.2)　幅(6.7)　厚さ(2.0)	64.5	ー
図5−44	71H	1層	土製品	土器片利用 土製品	長さ(5.2)　幅(4.2)　厚さ1.1	27	深鉢形　口縁部
図5−45	DR−108	Ⅱ層	土製品	異形土製品	長さ(7.2)　幅(4.2)　厚さ2.8	75.2	ー

槻ノ木遺跡土偶

図番号	出土地	層位	種別	部種	法量（cm）	重量（g）	備考
図5−46	一括 H−34	Ⅲ層	土偶	顔部	長さ(5.4) 幅(7.8) 厚さ1.8	46	ー
図5−47	一括 H−35	Ⅲ層	土偶	右腕部	長さ(5.3) 幅(3.8) 厚さ1.3	25.9	一枚